

皆人の「からだ」ばかりの寺参り 「こころ」は宿にかせぎをぞする (為愚痴物語卷六ノ一二)

生きた人間を「からだ」と「こころ」で対立させる二元論的把握は、視野を転じて、言語記号の成り立ちという問題に対しても、アナロジカルに適用することができる。^{*}

言語記号は、一定の音声形式と意味とから成り立っている。人間の「からだ」が「こころ」の器であるなら、音声形式も、また、意味の器にはかならない。「からだ」に「こころ」の宿っているものが生きた「身」であるなら、音声形式に意味の宿っているものが、すなわち「語」にかならない。

語の成り立ちを「身」との対比において把握する観点から、とりわけ注目される問題は、「語」の意味に対応する概念として、「身」の方に、「こころ」という言葉が見出されることである。わが国で、「意味」という言葉が、いつごろから使用されるようになったのかは判然としない。^{*}ヘボンの辞書には収められているが、日葡辞書など中世の辞書には見当らないようである。しかし、「意味」という漢語を知らない時代にも、「意味」を含蓄する言葉は存在した。それが、「こころ」という和語であったことは、あらためて紹介するまでもない。のみならず、この事実は、たとえ偶然であるかもしれないにせよ、語を人間とのアナロジで捉える観点から導かれた、「意味」と「こころ」の対応関係にいみじくも合致している。

一般に、意味論は、意味を客観的認識の対象として、当の言語主体から切り離しすぎたうらみがある。いま、語の意味を、「こころ」という和語によって認識しなおしてみると、⁽¹⁾語の意味と言語主体の心的活動は、確実に一本のキイ・ワードで架橋されることになるであろう。意味論にとって、これは、すこぶる重要な示唆だとはいえないであろうか。

^{*}

共鳴、親愛、納得、熱狂、うれしさ、驚嘆、ありがたさ、勇気、救ひ、融和、同類、不思議などと、いろいろの言葉を案じてみましたけれど、どれも皆、気にいりません。重ねて、語彙の貧弱を、くるしく思ひます。(太宰治『風の便り』)

事物は、それを名づける言葉が見出されない限り、存在しないに等しい。言語主体は、なにか明晰な^{めいせい}かたちで認識したいものがあるとき、現在の自分の「ところ」に過不足なく適合する「ところ」を具有した言葉をさがし求める。そうして、該当する言葉がつかまえられないとき、自分の「語彙の貧弱を、くるしく思」う。だが、語彙の多寡など、所詮は程度の差である。いくら語彙の豊富な人間でも、自分の「ところ」をぴたりと表現できない苦しみから完全に自由であることはできない。人間の世界は、言葉によって縦横に細分されてはいるものの、語の配分は、決してわれわれの経験世界に密着した精密度で行われているわけではない。⁽²⁾もつとも客観的に見える自然界ですら、実際は、なんら客観的に分割されていないというのが、言葉の世界である。以前、「語彙の構造と思考の形態」と題する小論の中で、次のように述べたことがある。「スペクトルにかけられた色彩を、現代日本語は七色で表わす。しかし英語では六色であり、^{*}ロデシヤの一言語では三色、リベリアの一言語では二色にしか分けない。言語によって、色彩の目盛りの切り方が相違しているのである。これが直ちに言語の構造の問題と結びついていることは、言語構造の概念を説明するための雛型^{ひながた}として、スペクトルの例が好んで採りあげられることを想起すれば十分である。言語が構造であること、構造とは分節的統一にほかならないことを、ここからわれわれは容易に認めることができる。思考活動は、この目盛りの切り方、言語の構造性に応じて営まれる。同じ虹に対しても、人はその属する言語の構造という既成の論拠の上においてのみ、色合を認知しうるのである。スペクトル中の色帯の数を、ミクロン単位で数えるならば、三七五種の多くにのぼると言われる。それを何色かに分割するということは、無限の連続である外界を、いくつかの類概念に区切り、そこにおける固定した中心、思想の焦点としての名称をもって配置することである。曖昧で不確かで変動しやすい人間の知覚は、名称によって新しい形をとり始める。客観的世界ははじめて整理せられ、一定の秩序と形態を与えられる。朦朧^{もうろう}として不分明な個人の感情、捉えがたい心理の内面も、すべて名称による以外には、自己を客観化し明確化するすべを持たない。スタンダールの『赤と黒』に、ジュリアンとの媾^{あいびき}のあとで、幸福の陶醉に耽^{ふけ}っていたその夜のド・レーナル夫人が、突然、自分の行為の「姦通^{アデルテール}」という怖ろしい言葉に宛てはまるのに気づいて愕然^{がくぜん}とする場面がある。言語以前の無意識の状態における個人的感情が、判然たる姿をとってその性格を客観的に現示するものは名称であることを、これは端的に物語っている。考えて

みれば、これほど危険千万なことはない。言葉によって、カオスがコスモスに転化することは事実だとしても、そのとき、名づけられたものは、他のあらゆる属性を切り捨てられ、無垢の純潔性を失ってしまう。

ベンジャミン・リー・ウォーフも言うように、言語とは、それ自体、話者の知覚に指向を与える一つの様式であり、言語は、話者にとって、経験を意味のある範疇はんちゆうに分析するための習慣的な様式を準備するものである。言語が押しつける恣意的な分類法、その上に立つ一定数の限られた言葉で、無限の連続性を帯びている内的外的世界を名づけること、それは、言語主体に指示して彼を特定のチャンネルへと追いつむこと、外部から一つの決定を強制することではないか。もしあなたが、或る人の行為や心理を一つの言葉で名づけるならば、あなたは、その人に、その人の行為や心理を啓示することになる。その人は、名づけられた言葉を手がかりに、あらためて自分をかえりみるだろう。

「泣きぬれた天使」という往年のフランス映画にも、そうした場面があった。ジュヌヴィエーヴは、盲目の彫刻家に対する友情とも憐愍れんびんともつかない漠然たる心情を、他人から「愛」という言葉で啓示されたとき、自分のすべてが決定されたことを知った。今度は、「愛」という言葉が、彼女の「こころ」を鍛えあげてゆく。或いは、人間の「こころ」が、言葉につかみとられて、否応なしに連行されてゆくのだといってもいい。「愛」とか「嫉妬」とか「憎悪」とかいう言葉が現れると、その言葉とともに、愛や嫉妬や憎悪が結晶してくる。もやもやした感情を、「愛」でとらえるか、「嫉妬」でとらえるか、「憎悪」でとらえるか、結びつき次第で、彼の運命は大きく違ってくるであろう。彼は「愛」をそだてることに成功するかもしれない。「嫉妬」に懊惱ちゆうぼうする男になるかもしれない。「憎悪」のあまり、女を殺す大罪を犯すに至るかもしれない。

*

人間の「こころ」と言葉の「こころ」との間には、相互にはたらきかける二つの力がある。一つは、言葉の「こころ」が人間の「こころ」に作用する力であったが、もう一つは、人間の「こころ」が、言葉の「こころ」に作用して、それを変えてゆく力である。言葉が、人間世界の細目に対してごく大まかにしか配置されていないものである以上、われわれは、自分の「こころ」を、適切な言葉によって表現できないという不幸を宿命的に負わされている。どうしても、「こころ」を託すべき言葉がなければ、

穴埋めに、新語を創造し、古語を復活し、外国語を借用するという方法も講ぜられる。

人間は、絶えず、その人、その時代に固有の「こころ」を持った言葉をさがし求めているものだ。新しい「こころ」は、それを関連づけることのできそうな「こころ」を持った言葉を見つけて、その中に押しこまれる。あとから押しこまれた方の「こころ」が、人々から強力に支持されつづけければ、新しい「こころ」は、古い「こころ」を押しつけて、新規にその主人ともなりうる。言葉の「こころ」を変える力は、すなわち、人間の「こころ」であつて、言葉の「こころ」が、人間から独立して、勝手に変わるのではない。言葉の意味変化が、人間の「こころ」の変化を前提とする以上、人間の「こころ」の側から、言葉の「こころ」が追究されなければならないのは当然であろう。⁽⁴⁾ 意味論は、人間の「こころ」と言葉の「こころ」の相互関係を究明する「こころ」の学とならない限り、人間の学としての「意味」を持ちえないといつても過言ではない。

(佐竹昭広「意味変化について」より。一部省略)

注(*)

アナロジカル＝analogical「類推による、類推的な」の意。

ヘボンの辞書＝ジェームス・カーティス・ヘボンによって幕末に編纂された、英語による日本語の辞書。

日葡辞書＝ポルトガル語による日本語の辞書。一六〇三年から一六〇四年にかけてイエズス会によって長崎で出版された。

ロデシヤ＝アフリカ大陸南部の地域名称。現在のザンビアとジンバブエを合わせた地域にあたり、二〇以上の言語が話されている。同じく西アフリカのリベリア共和国も二〇近い言語が話されている多言語国家。

問一 傍線部(1)はどのようなことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

「科学には限界があるかどうか」という質問をしばしば受ける。科学が自分自身の方法にしたがって確実なそして有用な知識を絶え間なく増加し、人類のために膨大かつ永続的な共有財産を蓄積しつつあるのを見ると、科学によってすべての問題が解決される可能性を、将来に期待してもよさそうに思われる。しかしまたその反面において人間のさまざまな活動の中のある部分が、ある方向に発展していった結果として、今日科学といわれるものができ上がったこと、したがってつねに科学と多かれ少なかれ独立する他の種類の他の方向に向つての人間活動が存在し、それらと科学とがある場合には提携し、ある場合には背馳しつつ発展するものであること、現在の科学者にとつてまだ多くの未知の領域が残っていることなどを考慮すると、素朴な科学万能論を信ずることはできないのである。

大多数の人は、恐らく何等かの意味において漠然とした科学の限界を予想しているに違いないのであるが、この問題に多少なりとも具体的な解答を与えようとする、まず科学に対するはつきりした定義を与えることが必要になってくる。ところがそれは決して容易でなく、どんな定義に対してもいろいろな異論が起り得るのである。しかし科学の本質的な部分が事実の確認と、諸事実の間の関連を表す法則の定立にあることだけは何人も認めるであろう。事実とは何か、法則とは何かという段になると、また意見の違いを生ずるのである。しかしいずれにしても、とにかく事実という以上は一人の人の個人的体験であるに止まらず、同時に他の人々の感覚によつても捕え得るという意味における客観性を持たねばならぬ。したがって自分だけにしか見えない夢や幻覚などは、一応「事実」でないとして除外されるであろう。もつとも心理学などにとっては、夢や幻覚でも研究対象となり得るが、その場合にもやはり、体験内容が言葉その他の方法で表現ないし記録されることによつて、広い意味での事実⁽¹⁾にまで客観化されることが必要であろう。この辺までくると、科学と文学との境目は、もはやはっきりとはきめられない。自己の体験の忠実な表現は、むしろ文学の本領だともいえるであろう。

それが科学の対象として価値を持ち得るためには、体験の中から引出され客観化された多くの事実を相互に比較することによつて、共通性ないし差違が見出され、法則の定立にまで発展する可能性がなければならぬ。赤とか青とかいう私の感じは、

そのままでは他の人の感じと比較のしようがない。物理学の発達に伴って、色の感じの違いが、光の波長の違いにまで抽象化され客観化されることによつて、はじめて色や光に関する一般的な法則が把握されることになるのである。その反面においてしかし、私自身にとつて最も生き生きした体験の内容であつた赤とか青とか青とかいう色の感じそのものは、この抽象化の過程の途中で脱落してしまうことを免れないのである。科学的知識がますます豊富となり、正確となつてゆく代償として、私どもにとつて別の意味で極めて貴重なものが、随分たくさん科学の網目からまれてゆくのを如何ともできないのである。科学が進歩するにしたがつて、芸術の種類や形態にも著しい変化が起るであろう。しかし⁽²⁾芸術的価値の本質は、つねに科学の網によつて捕えられないところにか見出されないのである。

一言にしていえば、私どもの体験には必ず他と比較したり、客観化したりすることのできない絶対的なものが含まれている。人間の自覚ということ自体がその最も著しい例である。哲学や宗教の根がここにある以上、上記のごとき意味における科学が完全にそれらに取つて代ることは不可能であろう。科学の適用される領域はいくらでも広がつてゆくであろう。このいわば遠心的な方面には恐らく限界を見出し得ないかも知れない。それは哲学や宗教にも著しい影響を及ぼすであろう。しかし、科学が自己発展を続けてゆくためには、その出発点において、またその途中において、故意に、もしくは気がつかずに、多くの大切なものを見のがすほかなかつたのである。このような科学の宿命をその限界と呼ぶべきであるならば、それは科学の弱点であるよりもむしろ長所でもあるかも知れない。なぜかといへば、この点を反省することによつて、科学は人間の他の諸活動と相補いつつ、人類の全面的な進歩向上に、より一層大きな貢献をなし得ることになるからである。

(湯川秀樹「科学と哲学のつながり」より)

問一 傍線部(1)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

問二 傍線部(2)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

問三 傍線部(3)「科学の宿命」とは何か、筆者の考える「科学」の本質を明らかにしつつ説明せよ。

三

次の文は、肥後国八代城主、加藤正方に仕えた西山宗因が著したものである。寛永九年（一六三二）五月、正方の主君であった肥後国熊本藩主の改易処分に伴い、宗因は正方ともども流浪の身となった。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

抑そもそもこの肥後の国をたもちはじめ給ひし年月を数ふれば、四十年あまり、二代の管領にていまそがりければ、たけきものふも恩沢のあつきになつき、あやしの民の草葉も徳風のかうばしきになびきて、家とみ国さかえたるたのみをうしなひてより、所なげにまどひあへる事、ことわりにも過ぎたり。数ならぬ身もたのみし人に伴ひて、東がた武蔵の国までさすらへありきて、ことし文月のころ都へ帰りのぼりても、なほ住みなれし国の事は忘れがたく、親はらから恋しき人おほくて、とぶらひがてらまかりくだりしに、こぞことしのうさつらさ、たがひに言葉もなし。かくてしばらくありて、また京のかたへと思ひ立つに、老いたる親、古き友などしたひとどめて、まづしき世をもおなじ所にありてかたみに力をも添へむなど、さまざまにいふを、ふりすてがたくは侍りつれど、とどまるべきよすがもなく、行く末とてもさだめたる事もなければ、しらぬ里は身をはづることもあらしなど思ひさだめて、長月の末つ方、秋の別れとともに立ち出で侍る。

（『肥後道記』より）

注（*）

二代の管領にていまそがりければ⇨加藤清正、忠広の父子二代にわたって肥後国熊本藩主であったということ。

たのみし人⇨加藤正方を指す。

問一 傍線部（1）を、比喻を明らかにしつつ現代語訳せよ。

問二 傍線部（2）はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問三 傍線部(3)を現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。